

ご 推 薦 文

内閣府が最近実施した「引きこもりに関する実態調査」によると、日本には現在約70万人もの「ひきこもり」がいるそうです。想像をはるかに上回るこの数字からわかることは、「ひきこもり」は単なる家庭問題だけにとどまらず、大きな社会問題にまで発展しているという現実です。

もはや保護者や家族間だけでは「ひきこもり」問題は解決できないという状況のなかで、「ひきこもり」を専門とするプロフェッショナルの養成は急務です。また保護者もひきこもる原因となっている複雑な要因や背景などを学び、今までとは全く違ったアプローチでひきこもった子どもと接する必要があります。

ひきこもりの子どもを持つ保護者は必ずと言っていいほど、子どもに「なぜ学校に行かないのか」と問います。その心理的背景には、ひきこもって不登校になった自分の子どもの不甲斐なさ、そして一日でも早く社会復帰してほしいという焦りが在ります。多くの保護者は「自分の子どもに限って落ちこぼれになるはずがない」と思いたい気持ちを募らせる一方で、実際に子どもが社会から脱落しつつある現実を受け止めることができません。

それ故に保護者は子どものよき理解者であることを忘れ、「なぜひきこもるのか」といった原因を子どもに繰り返し問い続ける傾向にあります。しかし子どもにとって「なぜ」という言葉は、保護者が自分を一方的に責めているように感じる非常に厳しい言葉なのです。ひきこもりの子どもにとって「ひきこもる」という行為は、自分自身を守る最後の手段です。保護者は子どものそうした不安な気持ちと葛藤そして挫折感をなかなか理解できません。

子どもに対する保護者の理解力不足という事実は、内閣府の調査からも明らかです。その調査によると「家族に相談しても役に立たなかった」と答えた子どもが全体の4割を占めています。また、ひきこもった約7割の子どもは「家族に申し訳ないと思うことが多い」と感じているそうです。子どもは子どもなりに「ひきこもる」自分と精一杯向き合っています。以上のことから、保護者が如何に子どもを理解しようとしていないかが分かります。このように家族の絆の希薄化がひきこもりを更に悪化させている一つの原因となっているのです。

さて、一般社団法人ひきこもり支援相談士認定協議会の「ひきこもり支援相談士養成講座」テキストは、ひきこもり現象を社会問題としてとらえ、実態調査からの客観的分析と実際の具体的事例やケーススタディーなどを用いながら、ひきこもりの実態を理解するために必要な基礎知識、ひきこもった子どもに対する対応などをわかりやすく解説しています。

本講座の特徴は、ひきこもり状態を見極める方法やひきこもりの分類などを学びながら、多種多様なひきこもりの現状と問題点を考察できるという点です。ひきこもりに関する相

談にあたっての心構えや手法、そして対応する時の留意事項などについても丁寧に解説されていますので、正確にひきこもりに対する理解および対処方法を学習することが可能です。

また教材の一つである『ひきこもり支援相談士養成講座資料集』には、家族からの一方的な視点だけでなく、実際にひきこもった本人からの実態調査も含まれていますので、両者の立場から客観的にひきこもりの実態を学ぶことができます。更にこの資料集には、心理臨床的な視点そして精神疾患等などの医学的見地からの専門的意見も掲載されています。まさに複合的重構造的な見地からひきこもりをとらえようとしたバランスのとれた教材と言えるでしょう。

「ひきこもり支援相談士養成講座」が、ひきこもりの実態を真に理解するうえで大きく裨益すると同時に、ひきこもり支援相談士に認定されるための必須の知識を会得するための貴重な教材として、ひきこもり支援に精進する人々の座右に親しまれることを希って、序文に代えさせていただきます。

本講座が一人でも多くのひきこもっている状態にある子どもやその保護者にとっての心強い拠り所となることを心より願っております。

八洲学園大学教授
岩井 貴生